九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

浦上の原爆の語り ： 永井隆からローマ教皇へ

四條，知恵

https://hdl.handle.net/2324/1398293

出版情報：九州大学，2013，博士（比較社会文化），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

氏　　名　：　四條　知恵
論文題名　：　浦上の原爆の語り―永井隆からローマ教皇へ―

論　文　内　容　の　要　旨

長崎の原爆被害は、しばしば「祈り」というキリスト教的なイメージと結びつけて語られ、その中で浦上はカトリック信仰と原爆被害を象徴する場所と捉えられてきた。長崎においては、「燔祭の犠牲として立派なお手本を残して行った」というように、原爆による死をカトリック信仰の中で意味づける特徴的な語りが生まれている。このような語りが生まれた背景には、カトリック教徒である永井隆という人物の影響があるとされてきた。医学博士だった永井隆は、1951 年に病没するまでの間に旺盛な執筆活動を行い、『長崎の鐘』（1949）を始めとする多数の著作を世に出したが、彼の著作に見られる原爆被害に対する独特な思想（燔祭説：原爆死を神への犠牲と捉える考え方）の功罪については、擁護の声がある一方で、批判も重ねられている。しかしながら、永井隆の燔祭説が与えた影響力の大きさは常に前提とされ、その受容が測られることはなかった。原子爆弾により甚大な被害を受けた浦上は、長崎においてカトリック信仰と原爆被害を象徴する場所と捉えられてきたが、永井隆とその燔祭説が注目を浴びる一方で、被爆地浦上のカトリック教徒の間で、実際に原爆被害がどのように語られてきたのかを扱った研究はなく、戦後 65 年間にもたらされた変化についても、詳細な検討は行われていない。

以上を背景に本稿では、原爆被害の記憶と表象について考察する一研究として、長崎における原爆被害を象徴する存在である浦上のカトリック集団の原爆の語りを対象に、主に教会組織やミッションスクールなどの資料を分析することで、語りの意味と力、その変容を実証的に提示することを目的とする。この際、被爆地浦上のカトリック信仰に支えられた独特な原爆の語りとして、時に長崎における原爆被害の表象全般に関わる問題と捉えられてきた永井隆の燔祭説の受容に着目する。分析にあたっては、歴史の物語論などを中心とした「歴史と語り」という枠組みを参照し、隠蔽・排除された語りが、どのようなプロセスを経て新たな歴史の語りとして浮き上がってくるのかという語りの現場における具体的な状況を提示する。

序章では、分析の際の理論的枠組みとなる「歴史と語り」に関連する先行研究とともに、原爆被害に関わる先行研究を概観し、原爆の記憶と表象という領域における本稿の位置づけを示した。

2 章「浦上と永井隆」では、浦上の歴史と永井隆の燔祭説を概要とともに、これまでの燔祭説をめぐる論争を概観し、実際の受容状況が測られることなく、戦後 65 年間にわたる変化も検討されていないという問題点を提示した。

3 章「焦点化する永井隆」では、占領期における原爆の語りを、永井隆及びカトリック教界の動向に着目しつつ、主に『長崎新聞』『長崎日日新聞』を用いて分析し、永井隆が最も脚光を浴びた占領期においても、燔祭説が与えた影響は局所的だったということを明らかにした。

4 章「永井隆からローマ教皇へ」では、長崎市の高等女学校の中で最大の原爆死者を出したカトリック系ミッションスクール、純心女子学園（旧：長崎純心高等女学校）を対象に、主に学校の刊行物（学校史、被爆体験記集、学校新聞など）から、戦後 65 年間にわたる原爆の語りを分析し、1981 年のローマ教皇ヨハネ・パウロⅡ世の来日を画期として、戦争を否定すべきものと捉え、原爆被害の悲惨さを語り継ぐことの意義を強調する語りが出現し、支配的な語りに変容が見られることを示した。

5 章「浦上の原爆の語り」では、浦上におけるカトリック教界を対象に、永井隆の活躍した占領期及びローマ教皇 ヨハネ・パウロⅡ世来日以後の 1980 年代を中心として、浦上教会の機関誌やカト

リック長崎司教区の機関紙などを用いて原爆の語りを分析し、浦上の原爆の語りが永井隆の影響の名残から抜け出し、ローマ教皇ヨハネ・パウロⅡ世の発言をめぐるものへとダイナミックに変容する様子を提示した。

占領期の浦上において、燔祭説が原爆の語りとして支配的な位置を占めていた。浦上のカトリック集団において燔祭説をめぐる語りは、地域に根差した集団の中でこれまでの歴史的理解に沿って集団の存在意義を強め、集団を構成する人々の間に入った「ひび」を統合し、ひいては集団自体を生み出していくという意味、そして力を与えるものだった。しかし、被爆者が高齢化し、社会状況が変化する中で、かつて緊密な結びつきを誇った浦上の地域共同体の結束は弱まるとともに、燔祭説の役割も薄れていった。このような中で、1981 年のローマ教皇ヨハネ・パウロⅡ世の来日を画期として現れた教皇の発言をめぐる原爆の語りは、原爆被害の悲惨さ、残酷さを訴える周縁化された語りを掬い上げる役割を果たし、支配的な語りとして受け入れられていく。

本論文では、「浦上の原爆の語り」という事例を通して、歴史的な出来事が語りとして生成される場において、いかなる政治的および社会的な力学によって支配的な語りが形成され、変容するのかを、具体的な諸集団に着目しながら実証的に提示することができた。これは、広島に偏りがちであった原爆の記憶と表象をめぐる研究に、長崎の事例から新たな展望を開いただけでなく、歴史哲学の分野が牽引してきた「歴史と物語」理論に対して、語りが生起する原爆からの実証的な足場を提供するという貢献をなすものである。